

とし月のいとなみ、片時のあひだに、雲けぶりとなりぬるをや、しかあるを、かのおとこがあらましの家は、はしりもとめ、つくりみがくわづらひもなし、雨風にもやぶれず、火災のおそれもなし、なすところは、わづかに一紙なれど、心をやどすにふそくなし、りうじゆほさつのたまひける事ありといへども、ねがうこゝろやまねば、まづしき人とす、まづしけれども、もとむることなければ、とめりとすと侍り○下

〔發心集七〕三井寺僧夢に貧報を見る事

中比みるでらに、わりなくまづしき僧ありけり、ねんじわびておもふやう、かく所縁のなきなめり、かくしも思事のだがふべきかは我ほかへゆきて、すぐせをも心みんと思ひて、ひるなどは旅すがたもあやしければ、あかつき出たつほどに、夜ぶかくおき、みちのほども、わづらはしかるべしとて、しばしよりふしたる夢に、いろあをみやせをとろへたる冠者の、わびしげなる我とおなじやうに、わらぐつはきなど用意し、いみじう出たつあり、さきくもみえぬ者なれば、あやしくて、をのれは何ものぞととふ、とし比さぶらふ者なり、いつもはなれたてまつらぬ身なれば、御とも申候はんとて、出たち侍るといふ僧のいふやう、さるものやはある、名をば何といふぞとへば、人々しき身ならねば、異名侍り、たゞうちみる人は、貧報の冠者となん申侍るといふと見て、夢さめぬれば、すなはち身のつたなきすぐせをしり、いづくへ行とも、此冠者がそひたらんにはと思ひて、ほかごゝろあらためて、あやしなからもとの寺にぞすみける。

〔翁草八〕關新助算術の事

關新助は元甲府御家來也、文昭院殿、御治世ニ至、御旗本の士と成、若き頃は八算をだに不知しが、家來の持る塵劫記を見て、其法を家來に習ひ、夫々面白き事に思ひ、色々算書を集め見れ共、不解事多し、夫より算學語蒙と云書を熟讀して、天元一の道理を辨え、自ら發明シテ様々の術を工夫